

---

# 星降る丘の子猫

歩羽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星降る丘の子猫

### 【Nコード】

N9804V

### 【作者名】

歩羽

### 【あらすじ】

綾女は夏の休暇で地元に戻ってきた。恋人の司は仕事が忙しく今日という日と一緒に過ごせない。腐れ縁の大輔と久しぶりに顔を合わせ、昔のことを思い出す。今日と同じように暑い日だった。

子供だったあたしたちは、あの日旅に出た。たどり着いたのは星降る丘。

大人になった幼馴染たちの、かけがえのない夏の思い出。

## 第一話

「綾女、ごめん。」

「もういいっ!」

ブチッ、プープープー

こんなはずじゃなかったのに・・・

夏の真っ昼間。

日陰が極端に少なくなるこの時間帯、照りつける太陽がジリジリと肌を焼く音が聞こえるようだ。

社会人になって8年。

夏休みを利用して地元に戻ってきた。

高校卒業後、地元を離れ就職した私は夏と冬に司と一緒に里帰りをしてきた。

司は小学生からの幼なじみだ。

高校1年の夏から付き合っていて、今は同じ街で働いている。

幼なじみから恋人なんてただの腐れ縁と言われることもあるが、あたしは司が好きだったし司はそれ以上にあたしを思ってくれている。これは自惚れなんかじゃない。

言葉にはしなくても、全身であたしを愛してくれているのをいつも側で感じているから。

本当なら今だつて一緒にいるはずだった。  
毎年二人揃つて地元に戻るが、今年は司の仕事が終わらず一人きりの里帰りになつてしまった。

「司は仕事か？」

カウンターの向こうから訪ねられる。

ここは幼稚園からの幼なじみ、大輔の実家が営む小料理屋だ。

「そう。あんな愛想なしのくせに、大口案件のプレゼンご指名されただつて。」

「あいつは口数多くないけど、しゃべったら説得力あるからな。」

さんまのお造りをあたしの前に出しながら、大輔が言う。

司は昔から何でもよくできた。

顔もまあまあ・・・いや、だいぶ整っている。

黒目がちな大きな瞳、きれいに通った鼻筋、少し薄めの唇が完璧な配列を組んでいる。

子供のころはさらさら艶々の黒髪を少し長めに伸ばしていたので、シヨートヘアだったあたしよりもずっと女の子みたいだった。

勉強も運動も要領がいいのか少し学んだだけでソツなくこなすし、大人になつてからもそれは変わらず、上司からの期待は大きいよう

で。

大輔はまだ学生だ。

調理系の専門学校に進学し一度は就職したが、医者になるために医学部に通いなおしている。

隣の大学近くで一人暮らしをしているが、こちらも夏休みで里帰りし実家を手伝っている。

夏のこの時期、大輔の家に集まるのがここ何年も変わらない、夏の風景だ。

「司はあたしより仕事が大事なんだって。」

ビールを飲み干しながら、憎まれ口を叩く。

「あいつが一番大切にしているのは今昔もおまえだろ。まあ大人になれば自分の気持ちだけで動けなくなることだよ。サラリーマンは大変なんだろ。」

困ったような口調で、大輔が言う。

そんなことわかってる。

司は忙しいなりにあたしとの時間を大切にしてくれている。

それをわかっているから、いつもはこんなふてくされたりしない。

ビールなんてハタチの頃は飲めなかった。

苦いだけで、おいしいなんて感じなかったのに。

味覚は大人になっているのに、あたしの心はあのころのままちっと

も成長していない。

「おばちゃんごちそうさま。」

奥で洗い物をしていた大輔のお母さんに声をかける。

「あらもう帰るの？　ってもうこんな時間だったのね。」

時計の針は11時をさしている。

「うん。帰るまでにまた来るね。」

「はいはい、司君と一緒にいらっしやい。」

「そうだね。できたらね。」

席を立つといつの間に戻ったのか、戸口に大輔が立っている。

「ほら。早く帰って風呂入って寝ろ。」

「うるさい大輔。子供じゃないんだから。」

軽口をたたきながら、大輔をにらむ。

なんだかんだで大輔も優しいんだ。

あたし家はすぐそこなのに、一人で来たときは危ないからなんて送ってくれたりする。

「今日はいいよ。おばちゃんの片づけ手伝ってあげて。」

あたしの言葉に大輔は何か言おうとしたみたいだけど、口には出さなかった。

やっぱり大輔は優しいと思った。

またねと言って、一人で店を出る。

引き戸を開けると夏の夜特有の、生暖かい空気まわりついてきた。それでも昼間の焼けるような暑さは和らいでいて、いつかの夏夜を思い出させる。

## 第二話

小学4年生の今日と同じように暑い夏の日。

夏休み、学校のプール解放に行った帰りのことだった。

近所で有名な変わり者が住む家の軒下から、何か聞こえた気がした。普段からこの家には近づくなど大人たちに言われていたが、子供の好奇心を留めることはできなかった。

人の気配がないことを確認し、柵がさび落ちた門構えを抜けて音を辿って縁側の軒下に近づく。

声の主は子猫だった。

産まれて間もない小さな子猫が三匹、ダンボールの中にいた。

「子猫だあ。」

そのかわいさに思わず手を伸ばしてしまった。

触れた子猫はやわらかく、そしてあたたかかった。

「なにしてたんだ。」

びくつとしたあたしの頭上からしわがれた声が降ってきた。

この家の住人である変わり者のおばさんだ。

この人がなにを生業にしているのか、何者なのか、子供のあたしは全く知らなかった。

「あつ、あの。」

「ああ猫。触ったね。じゃあもうお前のだよ。責任持って連れていくんだ。」

それだけいうと、おばさんは家に入ってしまった。  
あたしとダンボールの中の子猫を残して。

どうしよう。

しかたなく、あたしはダンボールを持ってその家の敷地から出た。  
どうしようなんて思ったけど本当は少し嬉しかった。

動物が飼いたかったあたしは、このままこの子猫を飼えると考えて  
いたからだ。

高鳴る気持ちを押さえきれず走って家に帰った。

家にはお母さんがいなかった。

あたしがうんと子供のころ、病気で死んでしまったから。

お父さんはあたしを大切にしてくれていたが、あたしのためと言  
いながら若い人と再婚した。

あたしを疎ましく思うような人だった。

そんな環境のせいで家あまり好きではなかったあたしは、よく大  
輔の家に通っていた。

大輔もあたしも一人っ子だったのでお互い兄弟のような存在だっ  
たし、大輔のおじちゃんもおばちゃんもあたしを可愛がってくれ  
るし叱ってくれる、自分の家よりもずっと居心地のいい場所だっ  
た。

家に着くと珍しくお父さんが早く帰っていた。

ダンボールの子猫を見せ嬉々としながら言った。

「買ってもいい？」

ダメと言われる事は考えていなかった。

お父さんもまた動物が好きなのは知っていたから。

「お母さんに聞いてきなさい。」

お父さんはそう言った。

あたしは継母のことをお母さんとは呼んでいなかった。

それは自分がお母さんと思えないからではなく、彼女がそう呼ばれることを拒んだからだ。

“私はこの子の母親になった訳じゃない”

初対面のあたしに向けられた彼女からの第一声だった。

あの人になんか聞かなくていいじゃん。

そう思いながらしかたなく聞きにいこうとしたが、そんな必要はなかった。

「イヤよ、そんな汚らしいの。全くそんなものを拾って来るなんて家に入れないで。」

継母が姿を見せたと同時にそう言った。  
それだけ言つとそのまま部屋の奥に姿を消した。  
お父さんを見るとあたしの頭に手を乗せ言った。

「元の場所に戻ってきておいで。」

お父さんは継母の言うことを否定しなかった。  
このことだけでなく、全てにおいてだ。  
いつもはあたしも逆らわないが、このときばかりは違った。

「でも、子猫だよ！このままになんてしておけないよ！」

食いついたあたしに、お父さんはそれ以上なにも言わなかった。  
お父さん都合が悪くなるとしゃべらなくなる。  
この話はこれで終わり、ということだ。  
あたしはいたたまれなくなりそのまま家を出た。

どうしよう。

今度のどうしようは本気のどうしようだった。  
この子猫たちをあの場所に戻すわけには行かない。  
親猫らしき存在は見あたらなかったし、あそこに置いたらあの家の  
住人に子猫たちがなにをされるかわからない。  
途方に暮れるしかなかった。

「どうしたの？」

背後からかけられたら声に振り返ると、そこには司がいた。

当時あたしは4年生で初めて同じクラスになった司が苦手だった。家以外では元気だつあたしと違い、司はこの頃から大人びていた。物静かで綺麗で頭のいい、自分とは違う司という存在に馴染めずいた。

「あつ。猫が鳴いて・・・でも飼えないからって。あの人は戻せつて言うしお父さんは聞いてくれなくて。」

説明にならず、おどおどと言うあたしに司は言った。

「拾ったの？でも飼えない。けど戻すわけにはいかない状況なんだね。そうか。」

俯いてなにも言わないあたしに司は続けた。

「うちは父さんがアレルギーだから飼えないんだ。じゃあ誰か飼えないか探してみようか。」

あたしは驚いて顔を上げた。

まさか司が手伝ってくれるとは思わなかった。

正面から見つめた司は困ったような、でもほっとけないというような顔で少し微笑んだ。

嬉しかった。

あたしを放っておくことなんて簡単なのに司は一緒にいてくれるんだ。

それまであたしの中の司は、無愛想で周りの喧騒とは我関せずな人だった。

同じクラスになって約半年、イメージが先行しすぎて苦手意識が育ってしまったっていたせいだ。

「綾女？司もかあ。珍しいな二人が一緒なんて！なにやってんだ？」

大輔だった。

プールで一緒だったが、その後も別の男の子と遊んでいたのをみた気がする。

大輔は司とも仲が良かった。

というか、だれとでも仲良くなれるヤツだった。

あたしも友達が多かったけど、静かな子より明るい仲間が多かった。だけど大輔は同じクラスの人みんなと、本当にみんなと仲良くなるヤツだった。

そばに来た大輔は、あたしが抱えるダンボールを覗き込んだ。

「子猫か！かわいいなあ！」

中から一匹を抱き上げ腕に抱いた。

「でも飼えないの。ダメだって言われた。」

あたしの言葉に司も家も無理だと続けた。

「家なら一匹はいけるかもな。とおちゃんも母ちゃんも猫好きだし。聞いてみようぜ！」

大輔の声にあたしは笑顔になり、早く行くことと急かした。司も笑顔で一緒についてきてくれた。

「そうねえ、一匹なら。ちゃんとお世話できるならいいわよ。」

大輔のおばちゃんはそう言って、子猫に少し温めた牛乳をくれた。

三匹の子猫はダンボールの中でそれを美味しそうに舐めた。

おばちゃんはあたしたちにもおやつと言って揚げパンをくれた。

おばちゃんの作る揚げパンは、大輔とあたしの大人気おやつだった。

一匹は大輔の家で飼えることになったが、子猫はあと二匹いる。このままにはしておけず、あたしたちはダンボールを持って貰い手を探す旅に出た。

旅なんて大げさな言い方だけど、小学4年生のあたしたちにとって、この時の出来事は本当に旅のようなものになった。

### 第三話

あたしは子猫の入ったダンボールを抱え、大輔と司とならんで歩いた。

出会う人みんなに声をかけていく。

あたしたちが住んでいるのはそう大きな町ではなかったけれど、周辺の大きな街への交通の便がいいことや環境のよさから住宅地が多くあった。

たくさんの人に声をかけたが、子猫をもらってくれる人はいなかった。それよりも変な子供、という目で見られているようだった。

「なんだよ！みんな冷たいな！！」

大輔はイライラしながら言った。

すぐ前に声をかけた大人に、子供は早く家に帰りなさいと言われた。その前に声を変えたガラの悪い人には、保健所に預ければ始末してくれるよなんてと言われたりもした。

その言葉に血の気が引いた。

こんな小さな命を始末なんて・・・考えられなかった。

それでも時間は過ぎていく。

大輔の家を出たときは5時前だったが、気が付けばもうあたりは暗くなっていた。

夏の夜は日が長いから、これだけ暗いということはもう子供だけでうろつく時間ではなさそうだ。

「どうしよう。」

あたしは切なくなつて、今日何度目かのどうしようを呟いた  
あんなにたくさんの人に声をかけたのに、だれももらってくれない  
なんて。

家の外にいる身近な大人はみんな優しくかったのに、知らない人はこ  
んなにも無常なのか。

一番そばにいる親という存在でさえ無常なんだから、それもしかた  
ないのかもしれない。

同時に、いつ“もう帰ろう”と言われるかとびくびくしていた。

大輔はきつと最後まで付き合ってくれる。

物心ついたころからずっとそばにいた大輔には、何も言わなくても  
あたしの気持ちをわかってくれて支えてくれるという絶対的な信頼  
があった。

でも司はわからない。

きつともう家に帰りたがっている。

一緒にさまよいだしてからほとんど口を開かない司が、いつ終わりを  
告げる言葉を口にするのか、あたしはそれにおびえていた。

「おい司あ。お前頭いいんだから、なんかいい考えないのかよ！」

なんて無茶ぶりを大輔が司に投げる。

やめてよ！内心そう思ったが、口にはできなかった。

司はもう家に帰りたいんだらうから、やめようって言うに決まってい  
る。

この子猫の命は風前の灯なのに。

でも司から出た言葉はそんなあたしの考えを吹き飛ばすものだった。

「この時間なら、繁華街に行けば人がいっぱいいるんじゃないかな。」

「

繁華街。

飲み屋や飲食店が多く立ち並ぶ、駅前通りのことだ。

確かにあそこなら多くの人が繰り出しているだろうけど・・・

「どうして？もう帰りたいんじゃないの？」

驚きのあまり、思ったことがそのまま口から出てしまった。

家に帰りたいたいはずの司がこれから繁華街に行こうだなんて・・・なんだ？

「え？帰りたいって誰が？」

司はあたしの言葉に驚いているようだった。

「それいいな！繁華街か！よしっ、行こうぜ！」

大輔はあたしたちの驚きのやり取りを全く気にせず、繁華街行きが  
ナイスアイデアと意気込んでいる。

「ほら行くぞ！」

さらにはあたしたちを置いて、サクサク歩き出してしまった。

「とりあえず、歩こうっ。」

司に言われ、大輔の後を追うように歩き始めた。

「帰ろうなんて思ってないよ。」

黙って歩くあたしの隣で司が言った。  
さっきの続きを話すつもりらしい。

「もう飽きちゃったんだと思った。」

素直な思いを口にした。

ずっとなにも言わなかった司が何を考えているかなんて、わかるはずもないんだから。

「この子達は小さくても一生懸命生きている命なんだ。飽きるなんてそんな無責任なこと絶対じゃないよ。」

司の言葉はあたしの心をあたたくした。  
最後まで見捨てない、ずっとそばにいる。  
そう言われた気がした。

「うん、ありがとう。」

あたしの中の司という人が、どんどん変わっていく。  
口数が少ないだけで嫌な奴なんかじゃない。  
心無い大人とは違う、優しさを持った人だ。

ついた繁華街は、思ったとおり人がたくさんいた。

このころにはすっかり夜も更け、ますます子供だけで歩き回るような時間ではなかった。

あたしたちは華やかな町の明かりの中で、自分が少し大人になったような気持ちでいた。

お酒の入った大人たちに声をかける。

相変わらず見向きもされなかったって、繁華街の陽気はあたしたちも包んでくれているようだった。

そんな時、声をかけてきた大人がいた。

「君たち、こんな時間に何をやっているんだい？」

警察官だった。

あたしたちが声をかけた誰かが、繁華街の交番に子供がうろつろしていると言ったため見回りしていたのだ。

「げっ!!」

大輔は警察官の出現におおげさに驚いてみせた。

司はまずいというった風に、眉間に皺をよせた。

「とりあえず、交番に来なさい。こんな時間に子供だけでうろつろ

していたら危ないよ。」

あたしは子猫を奪われるかもしれないという恐怖で足がすくんでしまった。

その時、大輔が司とあたしに囁いた。

「このまま交番に捕まったら子猫が危ない。逃げるぞ。」

えっ？と思った時にはもう、あたしが抱えていたダンボールを奪った大輔が行くぞ！！と走り出していた。

司はあたしの手を握り、大輔の後を追うようにあたしを連れて走り出した。

後ろから警察官の声が聞こえて来るけど止まるわけにはいかなかった。

そのまま振り返らずに、全速力で繁華街を抜ける。

一本裏道に入っただけで、さっきまでの喧騒がうそのように静かだった。

もう警察官の声は聞こえなかったけど、あたしたちはそのまま繁華街からはなれた。

「いやーびびつたな！」

ダンボールを抱えて先頭を走っていた大輔が、笑いながら言う。

「びびつたじゃないよ！警察官なんてちょー怖かったあ！」

「ぼくも。でもあそこで捕まるわけにはいかなかったし。しかたないか。」

司も怖かったんだなんて、ちょっとびっくりしたりした。

## 第四話

あたしたちは、人を避けるように町のはずれにある公園に向かった。住宅地にある公園とは違い、広々とした芝生や木造のアスレチック、野球場やテニスコートもあり昼間はたくさんの人が遊んでいる。すっかり夜の帳がおりた公園は、昼間の喧騒が嘘のように静まり返っていた。

あたしたちは芝生の丘に向かって歩いた。

公園自体が少し高い場所にあるからか、この丘からは町が見渡せる。

丘のてっぺんに三人並んで座りこむ。

あたしが真ん中で右に司、左に大輔が座る。

ダンボールからそれぞれ一匹ずつ子猫を抱き上げる。

あたしは初めから一番気になっていた、白地に薄茶のブチが入ったメスの子猫を抱いた。

大輔が抱いたのは真っ白な子猫だった。

こんがり日に焼けた大輔は闇夜に紛れていたので、腕に抱かれた真っ白な子猫は宙に浮いているようだった。

「お嬢〜!!」

大輔が子猫に向かって言う。

「お嬢って?」

意味がわからない大輔のセリフに思ったままを問う。

「この真っ白な感じ、お嬢様っぽくね？いいとこのお嬢！」

大輔は直観で名前を付けたようだ。

一匹は大輔の家にもらわれていくんだから、まあいいけど。

「じゃあこの子はセイだな。」

今まで黙っていた司が口を開いた。

司の腕の中におでこに金色の模様がある、それ以外はお嬢と同じく真っ白な子猫だった。

「セイ？どんな意味で？」

「おでこのこの模様、星みたいに見えない？」

確かに、おでこの模様はお星さまみたいだった。

「だから星って書いてセイって読むんだ。そのまま“ほし”じゃあ名前には向かないから。」

それが気に入ったとばかりに、子猫の小さな右手が司の唇を叩いた。司は子猫を優しいまなざしで見つめながら抱きなおした。

「おーなんかいいな！おしゃれじゃん！」

足の間の芝生に仰向けに寝かせたお嬢のおなかをくすぐっていた大輔が、司の命名に同意した。

お嬢なのにおなか全開・・・大輔ひどい。

「で、綾女はなんてつけるんだ？」

大輔に聞かれた。

あたしは名前を付けるつもりなんてなかったから、戸惑ってしまった。

腕の中からあたしを見上げる小さな瞳が、暗闇の中でキラキラ輝いている。

「チエリー。」

瞳を見つめながら言った。

「さくらんぼ？」

司に聞かれる。

そう、さくらんぼ。

だってちよつと真ん中よりの目が、さくらんぼみたいに見えただもん。

「チエリーか。かわいいね。」

「いいんじゃない！かわいいじゃん。」

司も大輔もそう言ってくれた。

チエリー、と呼びかけながら子猫を見つめるとぺろりと鼻の頭を舐められた。

この子も気に入ってくれたみたいだ。

あたしたちはそのまま芝生に寝転がった。

見上げた夜空は雲一つなく、満点の星空が広がっていた。  
今にも降ってきそうなたくさん星。

あたしは、吸い込まれちゃいそうだと思った。

子猫たちはあたしたちの周りをよたよたと歩き回っている。

チエリーは時々あたしの顔を前足でしてしてと叩く。

あたしに似て、さびしがり屋なのかもしれない。

かまうてと言っているようだ。

セイは司のそばで、司の指先を楽しそうに追っている。

お嬢は大輔のおなか攻撃が案外気に入ったようで、さっきからずつとじゃれあっている。

このままずっとここにいたい。

子猫たちはかわいいし大輔も司も優しい。

でもそんなの無理だ。

ずっとこのままなんてありえないし、時間だって過ぎる。

もうきつと夜中だ。

さすがに家に帰らなくちゃまずいことくらいわかっている。

「あ。」

司が右腕を頭上に掲げて声を出した。

「12時過ぎた。」

ああ、司は時計してたんだ。

4年生で時計って、大人だなあ。

なんて考えていると、司があたしの真上から顔を覗き込んできた。

「お誕生日おめでとう。」

だれが？なんてそんなことは聞かない。

間違いなくあたしだから。

なんで知ってるの？そんなことも聞かない。

あたしのクラスでは月の初めにその月の誕生日の子たちをみんなで祝う。

あたしは8月生まれだったから、夏休みが始まる前に祝ってもらった。

それよりも、司が覚えていてくれたことに驚いた。

「まじか！？綾女おめでと！！司よく覚えてたなあ。てかもうそんな時間なんだな！」

誕生日当日におめでとを言ってくれる人なんて、お父さんと大輔家族以外はいなかった。

それが子猫を拾うまで苦手だった司が一番に、だれよりも先におめでとと言ってくれた。

「あ、ありがと。」

驚きのあまり、どもってしまった。

司のおめでとはあたしの心をあたたかくしてくれた。

心があたたかいなあなんて思っていると、なんかほつぺたもあたたかかった。

「なんだ！？おまえ泣いてんのか！？」

大輔に言われて、自分が泣いていることに気が付いた。

人前で泣くなんて。

大輔の前だって泣くことはそうなかった。

でも止まらないの。

あつたかいところが涙になって溢れてくるみたいだった。

司は何も言わなかった。

何も言わなかったけど笑いもしなかった。

ただ黙って隣に座っていてくれた。

大輔はぼろぼろこぼれるあたしの涙をTシャツの裾で拭ってくれた。

しばらくそのまま、三人そろって何も話さなかった。

子猫たちはいつのまにか三匹丸まって眠ってしまったようだ。

「そろそろ帰るか。」

以外にも切り出したのは大輔だった。

最後まで粘るかと思っていたのに。

でも大輔が言わなくても、遅かれ早かれあたしが司が口に使っていた。

家に帰ろう。

そう決めたあたしたちは、子猫たちをダンボールに入れ家に向かって歩き出した。

## 第五話

うちの近所にある図書館の前を過ぎたところで、遠くから声がした。

「あれ！ほら子供たちよ！」

大輔のおばちゃんだった。

おばちゃんはあたしたちを見つけると、走って近づいてきた。

おばちゃんの後ろにはおじちゃんもいる。

走ってきたおばちゃんは、大輔、司、あたしの頭を順にげんこつで殴った。

「こんな時間までなにやってるの！あんたたちは！どれだけ心配したと思ってるの！」

げんこつは痛かったし、いつになく怒るおばちゃんが怖かったけど、すぐく心配させてしまったんだと思った。

「ごめんなさい・・・」

あたしたちは三人はしょぼんとしながら謝った。

おばちゃんは泣いていた。

あたしたちが無事に帰ってきたことに安心して、涙を流していた。

大輔のおじちゃんは泣いて怒るおばちゃんをなだめ、げんこつされたあたしたちの頭を撫でてくれた。

「綾女！」

あたしを読んだのはお父さんだった。  
どうしてここに・・・

正直お父さんがあたしを探しているとは思わなかった。

あたしよりもあの人を大切にしているお父さんは、あたしがいなくなつて清々してるんじゃない、と思つていた。

そんなお父さんが、あたしを探してくれていた。

いつもきつちりセットしている髪の毛は崩れているし、走り回ったのか服もよれよれになっている。

「心配した。」

そつといいながらあたしを抱きしめた。

お父さんに抱きしめられるなんて、いつぶりだろう。

久しぶりのぬくもりは、当たり前だけどお父さんの匂いに溢れていた。

「司！」

声の主は、司のおじさんとおばさん、それに高校生のお姉さんだった。

おばさんとは何度か学校で顔を合わせたことがあったが、おじさんとお姉さんは初めてだった。

司もお姉さんもお父さん似なんだな、なんて思ったことを覚えている。

お姉さんは司をそのまま大きくしたようなきれいな人だった。

おじさんはすらつと背の高い、渋い感じの人。

目元も通った鼻筋も薄い唇も、司とよく似ていた。

パチンツ！

その渋いおじさんが、司の頬を叩いた。

おじさんはそのまま司を連れてあたしとお父さんの所へ来た。

「お嬢さんをこんな時間まで連れまわしてしまい、大変申し訳ありません。」

司のお父さんが、その隣で司も同じように頭を下げる。

違う。

連れまわしたのはあたしのほうだ。

司はあたしに付き合ってくれていただけ。

それを告げたけど、それでも悪いのは司だよ、とおじさんはあたしにいった。

後からそばにやってきた、おばさんにも謝られた。

少し離れたところでお父さんと司のおじさんおばさん、大輔のおじちゃんおばちゃんはお互いに頭を下げあっている。

当事者であるあたしたちは、子猫のダンボールのそばでバツの悪い思いでいた。

子猫たちはとりあえず、大輔の家に連れて行くことになった。またこんなことをされては困ると思った大人たちが、貰い手が見つかるまでちゃんと面倒をみることにしたからだ。少し惜しい気持ちでいたけど、帰ってしっかり休んだら子猫に会いに行く約束をしてお父さんと手をつないで家に帰った。

あたしたちの短い旅は、こうして終わりを告げた。

この旅の主人公はあたしたち三人と子猫たちだけど、捜索に駆り出された大人たちは思った以上に多かった。

親たちだけではなく繁華街であたしたちに逃げられた警察官、学校の先生たち、町内会のおじさんおばさんと数えればきりがない。何年もたった今でさえ、この時期に顔を会わすとあの時はねえ、なんて言われたりするくらい大事になっていた。

お父さんと家に帰ると、あの人はいなかった。

どこに行ったのとは聞かなかった。帰り道にお父さんに言われたからだ。

「あの人はもういないよ。これからはお父さんと二人でさびしいかもしれないけど・・・」

そんなことないという変わりに、お父さんの手をぎゅっと強く握った。

お父さんは反対の手で頭を撫でてくれた。

あたしはやつと家に帰ってきた。

お父さんとあたしの家に。

ゆっくり休んで、夕方から大輔の家に行った。

もう司も来ていて二人は子猫と遊んでいた。

さくらんぼの瞳をキラキラさせたチェリーが迎えてくれた。

「遅かったなあ！」

大輔はやっぱりお嬢のおなかをくすぐりながら、にかかつと笑って言った。

「ちゃんと眠れた？」

司はセイの喉元を撫でながら聞いてきた。

「うん！お昼ご飯食べてまた寝ちゃったくらいだよ！」

そうなんだ。

本当はもっと早く来ようと思っていたのに、お昼ご飯のあとリビングで昼寝してしまった。

目が覚めるとだいぶ時間がたっていて、あわててやってきたのだ。

子猫と遊んでいるとあっという間に時間が流れていく。

「そろそろ始めるわよー。」

おばちゃんの声に呼ばれ、大輔の店の小上がりに集まる。

「わあっすごいー!」

「おおーごちそうじゃん!」

あたしと大輔が大喜びする。

「はいはい、ちゃんと座りなさいよ。大輔と司くんはこっち、綾ちゃんはそのね。」

おばちゃんがテキパキと指示する通りに座った。

テーブルの上にはごちそうが所狭しと並べられている。

「じゃあ電気消すからね。暴れちゃだめよ。」

あたしの前にろうそくを立てたケーキが置かれる。

大好きなイチゴがたくさんと“あやめちゃんおめでとつ”と書かれたチヨコレートが乗っている。

今日はあたしの誕生日会だ。

この日は毎年小料理屋をお休みにして、大輔の家で祝ってもらって

いる。

お父さんは仕事で最初から参加することは少ない。

今日もまだ来ていないけど、絶対来てくれるって朝の出勤前に約束をした。

お父さんと、大輔家族以外でこの日に集まってくれる人は今までいなかった。

でも今日はここに司がいる。

それがなんだかくすぐったくて、そしてうれしかった。

ろうそくを吹き消して、誕生日会が始まる。

おめでとうといっぱい言われて、おいしい料理をいっぱい食べて目いっぱい楽しんだ。

宴もたけなわとなってきたところに、お父さんが帰ってきた。

遅くなつてすみませんなんて、おばちゃんおじちゃんに言っている。昔からの知り合いだけど、お父さんはあんまり周りの人にくだけた態度をとらない。

根が真面目なんだと思う。

「遅くなつたね。」

あたしのそばにやってきたお父さんが言う。

「お帰りなさい！もうおなか一杯だよ。」

ケーキまで平らげたあたしは、本当におなか一杯だった。

お父さんが何か持ってきたみたいだけど、それはもう食べれそうに

ない。

「これは食べ物じゃないよ。誕生日プレゼントだ。」

お父さんはそう言いながらあたしに持っていた紙袋を渡す。

いつも誕生日プレゼントはあたしのほしいものを買に行っていたから、お父さんだけで選んでくるなんて驚いた。

「え！？そんなの？」

「開けてごらん。たぶん気に入ると思う。」

言われるままに、ドキドキしながら袋を開ける。

小さな箱の包みをほどき、ふたを開ける。

中には赤い首輪が3つ入っていた。

「家で飼えるのは一匹だけだよ。でもせっかくだからみんなお揃いにしたらいいと思ってるね。」

夢みたいだった。

飼っていいんだ、連れて帰れるんだ。

「ありがとう！！すごいうれしい！！」

喜んでいうあたしを見て、お父さんも笑った。

そばで見えていたおじちゃんおばちゃんも笑っていた。

「よかったじゃん綾女！」

「よかったね。」

大輔も司も一緒に喜んでくれた。  
首回りはみんな真っ白だから、赤がよく映える。  
さっそくつけようと思ったけど、子猫の首には大きすぎた。  
もう少し成長してからつけることにした。

その夜、さっそくチェリーを連れて帰った。  
家には猫を飼うために必要なものが一式、そろえられていた。  
これもまとめて誕生日プレゼントだった。  
チェリーがそばにいることがうれしくて、なかなか寝付けなかった。

残ったセイも一週間後、貰いい手が決まった。  
司のお姉さんの友人で隣町に住む人だった。  
あたしたち三人は、セイと一緒にお揃いの首輪を渡した。  
セイを連れて行くその人は、大きくなったらつけるね、いつでも会  
いに来てね、と言ってくれた。  
とても優しいそうな人で安心した。

あたしたちは、それからだいたい三人一緒に遊んだ。

大輔の家かあたしの家で、お嬢とチェリーと一緒に遊んだ。

司の家にも行くようになった。

おねえさんがときどき、セイの写真を見せてくれたりもした。

すっかり大きくなった猫たちの首をお揃いの赤い首輪が彩っている。

首輪はしばらくすると痛んでできてしまったので、新しいのに変えた。

お嬢とチェリーはやっぱりお揃いにしたけど、セイの首輪は買えなかった。

セイを引き取ったお姉さんの友人一家は、半年後に遠くの町へ引っ越してしまっていたから。

さびしいけど、きっとセイもあの優しそうな人の家で幸せにしていると思う。

## 最終話

大輔の店を出たあたしは、酔い冷ましもかねていつかの丘に来ていた。

ここはあの頃と同じだ。

町が見渡せるし空には満点の星空が広がっている。

芝生に腰を下ろし、旅をした夏を思い出して懐かしさを感じる。

あの夏から、あたしの誕生日には三人そろってこの丘に来ていた。

中学生までは親同伴で、高校生になってからは三人だけで星を眺めた。

ずっとずっと、日付が変わるときには大輔と司が一番そばにいてくれた。

でも今年は一人だ。

司と一緒にいられないなら、大輔と二人で過ごす気にもなれない。

こうやって離れていくんだろうか。

いや、もういい大人なのに今まで一緒だったのが奇跡なのかもしれない。

いつまでも子供のままじゃない。

友達だった司をいつしかあたしは好きになって付き合うようになったし、大輔だって結婚を約束した彼女がいる。

あの旅はあたしの中で今でもかけがえのない思い出だけど、だからって二人をこの日に縛り付けるわけにはいかない。

気持ちと一緒になら、場所やかたちが変わってくのもいいかもしれ  
ない。

「やっぱりここにいた。」

声と同時に、後ろからあたしを抱きしめる強い腕。

嘘だ。

ここにいるはずない。

仕事だって言ってたじゃない。

「どうして……」

「仕事片づけて、高速飛ばしてきた。」

あたしたちが働く街からここまで、高速で3時間はかかる。

仕事に疲れているのに、そんな長時間かけてきてくれたなんて。

あたしを包み込む大きな体に、これ以上ない愛おしさがこみあげてくる。

「疲れてるのに。」

「今日はここにいなきゃダメなんだ。お前いきなり電話切るし、電  
源まで切っただろ。夜中までには帰るって言おうと思ったのに。」

「あ……ごめん。」

あの電話の後、イライラのまま電源まで切ってしまったことを思い出したあたしはいたたまれなくなった。

「いいよ。ここにいるのはわかってたから。俺こそ一緒に帰れなくてごめん。」

司は優しい。

あの夏からずっと、今でも変わらずあたしを大切にしてくれている。

いつの間にこんなに大きくなったんだろう。

成長期が早かったあたしは、中学に入るまで三人の中で一番背が高かった。

年を重ねるごとに二人はどんどん大きくなり、いつのまにか追い越され今では見上げるほどだ。

司のこの腕は、あたしを守ってくれる。  
ずっとずっと変わらない、あたしの中の絶対。

「いいの。今一緒にいられるだけでじゅうぶん。」

こころのままを言葉にした。

ほかには何もいらない。

あたしにはこの腕だけでいいんだ。

とてつもなく愛おしい、あたしの司。

振り向くとそこには、大人になった司がいる。

鼻筋はあいかわらずきれいで、薄い唇はどこか色気を帯びた。黒目がちだった瞳は切れ長になって、あたしを見つめている。

「愛してる。誕生日おめでとう、綾女。」

あの夏と同じ星降る丘で、あたしは26回目の誕生日を迎えた。

「ありがとう。あたしも愛してる。」

子供だったあたしたちは、愛を知った。

きっと来年の今日も再来年の今日も、この先ずっとあたしはこの腕の中にいる。

## 最終話（後書き）

この話は私が子供のころの実体験をベースにしています。  
私にとっても忘れられない大切な思い出です。

最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9804v/>

---

星降る丘の子猫

2011年8月25日21時21分発行